研究資料

テニスのグラウンドストロークにおける ショットのコンビネーションに関する実践知：
国際レベルで活躍した女子テニスプレーヤーの語りを手がかりに

北崎　悦子[1)]　　會田　宏[2)]

Etsuko Kitazaki[1] and Hiroshi Aida[2]: Practical tips on shot combinations for the ground stroke in tennis: the perspective of international tennis players. Japan J. Phys , Educ. Hlth. Sport Sci.

Abstract: This study aimed to clarify the structure of effective shot combinations for the ground stroke in tennis that can be practically applied to improve individual tactics by drawing on the wisdom of elite tennis players. The interview questions considered the following 3 concepts: shot combinations, tips on shot movements, the perspective of gauging shots that are advantageous in a rally, and consciousness when moving. The survey method employed a semi-structured interview format. The first author conducted the interviews and analyzed and interpreted the content of the responses; the co-authors performed triangulation to increase the objectivity of the interpreted analysis results. The results obtained were as follows:

1) Outstanding tennis players were divided according to 2 types of behavioral strategy for ground stroke shot combinations: in one strategy the player acted according to the opponent, and in the other the opposite situation applied.

2) A determining factor for gaining advantage during a rally (i.e., an aggressive stroke or a defensive stroke) was the approach toward the ball in the preparation phase of the ground stroke.

3) The course of the ground stroke (straight or cross) was shown to change if the ball was approached and hit in a way that was applicable for either course.

Key words : interview survey, individual tactics, qualitative research
キーワード：インタビュー調査，個人戦術力，質的研究

Ⅰ　緒　言

1.　テニスのグラウンドストロークのラリーの重要性

テニスは，ネットを挟んで相手と対峙し，交互にボールを打球し合う球技である（公益財団法人日本テニス協会，2015a，p. 130）．ボールを打球し合うこと，すなわちラリーは，サーブが打たれた瞬間からポイントが決まるまでであり（公益財団法人日本テニス協会，2015b，p.13），サーブ，レシーブ，グラウンドストローク，ボレー，スマッシュといった基礎技術をいかに組み合わせて，構成するかが重要であると言われている（佐藤，1991）．高橋（1998）はテニスの技術を「始まりの技術」，「ベースラインの技術」，「攻撃的技術」，「守備的技術」の 4 つに分類し，大学生男子テニス選手においては，試合全体の 4 分の 1 以上のポイントが「ベースラインの技術」で終わっていたと報告している（高橋ほか, 2006）. また山田（1996）は，女子の試合においては，ベースラインでの打ち合いの比率が高いことから，グラウンドストロ

1）筑波大学大学院人間総合科学研究科
〒 305-8574　茨城県つくば市天王台 1-1-1
2）筑波大学体育系
〒 305-8574　茨城県つくば市天王台 1-1-1
連絡先　北崎悦子

1. *Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba*
1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8574
2. *Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba*
1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8574
Corresponding author　etsuko_kitazaki@yahoo.co.jp

ークにおける配球が重要であると述べている．これらのことは，いずれもテニスのゲームに勝利するためには，グラウンドストロークのラリーの攻防を制することが必須となることを示していると考えられる．

2. テニスのグラウンドストロークのラリーにおけるショットのコンビネーション

ラリーの中で繰り出される打球の役割は，「つなぎ球」，「決め球」，「逃げ球」に区別され，さらに「つなぎ球」は，相手から攻撃されない程度に返球する「消極的なつなぎ球」と，「決め球」が来るように仕向ける「積極的なつなぎ球」の 2 つに分類される（海野，1994）．この「積極的なつなぎ球」と「決め球」との組み合わせは，実践の場ではショットのコンビネーション，配球パターンなどと言われ，ポイントの獲得に大きく影響している．それは例えば，フォアハンドのクロスのラリーの打ち合いの中で，自分の打球を相手コートのベースライン付近に深く打ち込み，相手の返球が甘くなるように仕向け，返ってきたボールをストレートに打ってポイントを決めるというようなコンビネーションである．卓越したテニス選手はショットのコンビネーションを状況判断を含めた個人の戦術行為（會田，2006，p.179），すなわち実践知として体系化し，それをゲームの「流れ」の中で戦略的に用いている．卓越した選手がどのようなショットのコンビネーションを，どのような状況でどのように相手と駆け引きしながら使おうとしているのか，つまりテニスのラリーの攻防における個人戦術力の構造を明らかにすることは，実践現場の戦術指導において有益な知見になると考えられる．

3. ショットのコンビネーションに関する先行研究と指導理論

日本テニス協会は，テニスの戦術に関する原則的な考え方について，自分のコートにボールがある局面と相手のコートにボールがある局面に分けて示している（公益財団法人日本テニス協会，2015a，p.131）．しかし，その内容をみると，自分のコートにボールがある局面においては，ボールの方向，回転，スピード，距離，高さを的確に選択して打球するボールコントロール能力が必要であること，一方相手のコートにボールがある局面においては，自分が次に打球するために合理的な場所で相手のボールを待つポジショニング能力が必要であること（公益財団法人日本テニス協会，2015a，p.131）を示すに留まっており，戦術的思考に関してはほとんど触れられていない．また，テニスにおけるラリーの攻防やショットのコンビネーションに関する先行研究では，事象を客観的に数量化したデータが提示されてきた（Gillet et al., 2009; O’Donoghue and Ingram, 2001；山田，1996）．しかし，これらの数量化したデータのみでは，複雑な要因が絡み合う中で発揮される行為を総体として理解したり，行為の意味や意図を理解することはできない（會田，2012）．これらのことは，ショットのコンビネーションに関する合理的な指導を行う基盤が整っていないことを示している．

4. 研究目的

そこで本研究では，国際レベルで活躍した女子テニスプレーヤー 4 名を対象に，シングルスのグラウンドストロークにおけるショットのコンビネーション，すなわち「積極的なつなぎ球」と「決め球」とのコンビネーションについてインタビュー調査を行い，卓越した選手の持つ実践知を知識化することで，グラウンドストロークにおけるラリーの個人戦術力の実相を明らかにし，個人戦術力の向上に役立つ知見を実践現場に提供することを目的とした．

II 方 法

1. 対象者

対象者は，国際レベルで活躍した経験を持ち，すでに引退している元プロテニスプレーヤー 4 名である．この 4 名は，さまざまなゲームの状況を経験し，個人戦術力を国際レベルにまで高めていった過程の中でグラウンドストロークにおけるラ

リーの戦術に関して組織化されていった経験を持ち，行為の意味を語りによって提示できると本研究者が判断したため，協力を依頼した．それぞれの競技プロフィールは以下の通りである．

不田涼子氏：全国小学生テニス選手権優勝，全日本ジュニア選手権 U18 優勝，国際大会 $25000 優勝，自己最高世界ランキングシングルス 143 位，右利き

赤堀奈緒氏：マルコーウィンブルドンジュニアベスト 4，全日本学生テニス選手権優勝，全日本テニス選手権ベスト 16，国際大会 $10000 複優勝, 自己最高世界ランキングシングルス 349 位，右利き

竹村りょうこ氏：全国小学生テニス選手権準優勝，全国中学生テニス選手権第 3 位，全日本ジュニアテニス選手権 U18 ベスト 8，全日本学生テニス選手権優勝，全日本テニス選手権準優勝，全豪オープン複出場，国際大会 $10000 優勝，自己最高世界ランキングシングルス 325 位，右利き

佐伯美穂氏：全国高等学校テニス選手権優勝，全日本テニス選手権優勝，全仏オープン 3 回戦，自己最高世界ランキングシングルス 56 位，右利き

それぞれの対象者には，本研究の趣旨や調査内容について事前に電話および文書にて十分に説明し，調査への協力を依頼し，承諾を得た．いずれの質問項目についても回答を拒否できることを伝え，調査内容の音声および VTR 記録，研究成果を実名で公開することの了解を得た．調査の趣旨説明からインタビュー実施までの間に，対象者とラポールを形成すること（桜井・小林，2005, pp. 83-84）に努めた．

2. インタビュー調査期間

インタビュー調査は，2016 年 8 月 4 日から 2016 年 9 月 24 日の間に実施した．

3. 聞き手の現場感覚および生成的視点

本研究における聞き手は，調査者本人であり，テニスを専門とし，プロ選手として国際大会に出場した実績を持っている．対象者の語りを深く理解し，語りにリアリティを感じる現場感覚および生成的視点を持っていると考えられる．

4. インタビューの調査の内容と方法

インタビューの調査内容は，競技活動を支えたショットのコンビネーション，ショットに関する動きのコツ，ラリーの主導権を握るショットを見極めるポイントまたは動くときの意識であった．

動きのコツの同定を容易にするために，インタビュー調査の 1—2 週間前に調査内容を記述するアンケート調査票を対象者に送付し，ショットのコンビネーションなどについて振り返って回答させ，返信させた．インタビュー調査時にはそれを補助資料として用いた．

インタビューは，本研究の筆頭著者が半構造化面接の方法を用いて対象者の指定した場所で行った．すべての発言は，IC レコーダーを用いて録音し，身体を使ったデモンストレーションはビデオカメラを用いて撮影した．インタビュー調査の内容と標準的な流れについては，中込（2003）を参考に本研究の筆頭著者と球技のコーチングを専門とし，博士の学位を有する 1 名の研究者との間で協議して決定した．

5. 語りの内容の作成

まず，IC レコーダーを用いて録音したインタビュー調査のすべての発言内容を逐語録として文章におこした．次に，語り全体を理解できるまで逐語録を読み込んだ．続いて，語りの意味内容を崩さないように，文脈を尊重しながら語りの内容としてまとめた．さらに，語りの内容をそれぞれの対象者に送付し，対象者の発言の意味内容と本研究者の解釈が適合しているか加筆および訂正箇所はないか確認した. 修正の要求があった場合は，それに従い，語りの内容を修正した．

6. テクストの作成

対象者それぞれの語りの内容から，グラウンドストロークにおけるショットのコンビネーション，ショットに関する動きのコツが記述された箇所を抽出し，対象者ごとにテクストとしてまとめた．テクストを作成後，その信頼性と妥当性を高めるために，筆頭著者と共著者との間でトライアンギュレーションを行った．

7. テクストの分析

本研究では，「正確な思い出」に固執することや，語り手による「記憶違い」や「忘却」という事態に困惑し苦心することではなく（桜井・小林，2005，pp.54-55），対象者の語りは，ショットのコンビネーションにおけるさまざまな状況を克服し，その達成力を国際レベルにまで高めていった過程の中で組織化された経験の語りであり，意味づけられた行為の語りととらえて分析を進めた．

Ⅲ 結 果

以下に，グラウンドストロークにおけるショットのコンビネーションの実践知に関するテクストを対象者ごとに示す．なお，テクスト中の（ ）は，調査者の補足を示す．

1. 不田涼子氏

バックのストレートが得意ショットなので，バックのクロスラリーを打ってクロスコートで十分に相手を追い込んだところでストレートに展開するのが，私のポイントパターンでした．

（ストレートに打つかどうかは）相手の動きを見て判断します．相手の動きは，自分が打とうとしているボールをしっかり見て，その背景として相手の全身のバランスや立っている位置を把握して，相手が「コートの隅に居るな」と思ったら，ベースラインの中に入りストレートに展開していました．

（判断する時機は）自分が打って，ラケットからボールが離れた少し後くらいです．自分の打球感覚とネットを越すボールとを見て「だいたいあの辺に落ちる」と分かります．相手のバランスが少しでも崩れて「100%（の体勢）では打てない」と分かったら，少しベースラインの中に入って浅く返ってくるボールを待ちます．後ろで待っていてボールが飛んできてから中に入って打つのではありません．これは，（打球感覚とボールの弾道を手がかりに）相手の体勢を先に読みます．

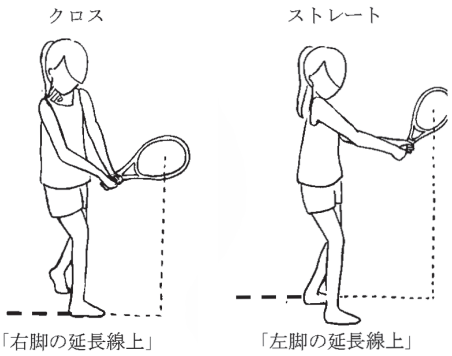


図 1 インパクトの位置（不田氏）

打点はクロスは右脚の延長線上，ストレートは左脚の延長線上です（図 1）．ストレートの方がボールを引き込み，ワンテンポ遅らせて「クッ」と体幹にタメを作って流します．変えるのはタイミングだけで，打ち方は変わらないので（相手にコースは）バレません．

クロスラリーになって，相手を少し動かしたいなという時にもストレートに打つことがあります．（自分がベースラインの後ろにいるので）それはエースを狙うボールではありません．また，明らかに後ろでバックのクロスで激しい打ち合いになって，私のボールに少し角度が付いたら，早いタイミングで思いっきりエースを狙いに行くことはあります．

フォアのラリーでもバックのラリーでも，相手から遅いボールが返ってきたらショートクロスに 1 回落として，次に返ってきたボールをストレートに展開するのも私のポイントパターンです．ショートクロスに関しては（ボールを）身体の方に思いっきり引き込んで，回転量を上げるためにラケットを振り切って，ラケット面で（コースに）角度を付けます．このショートクロスに打った次のストレートは決めに行っています．でもショー

トクロスは，中途半端だったら（逆に相手の）チャンスボールになって打たれるので気を付けて使っていました．絶対に効くだろうなっていう場面でしか打たなかったです．例えば，ずっと後ろでバックの深いクロスラリーをしていて相手のラリーが少し浮いた時，相手のボールがゆっくりで少し角度の付いた時です．また，それまでの（試合の中で打っていた）ストレートが効いていて，（自分がバックに）構えたらストレートかなと相手が思ってくれると，簡単にショートクロスが決まります．でも，ストレートが入ってなかったら，（相手に読まれて）ショートクロスはすぐに捕られます．試合の最初に相手にどう印象付けられるかによって，プランニングが変わってくるのです．

フォアは片手打ちのため，打点が少し身体から近かろうが遠かろうがごまかしが効いてしまいます．そのため，テイクバックはラケットと左手を一緒に引くように意識しました．それは，両手打ちであるバックのように身体を捻って体幹を使えるようにするためです．

2.　赤堀奈緒氏

バックのクロスラリーから，相手をしっかり深く追い込んでストレートに展開するのが，私のポイントパターンでした．

相手にとってベストなクロスのボールを，こちらが狙いすましてストレートに打つことによって，相手は「ストレートに来るかもしれないから，コートの全面をもっと守らなきゃいけない」と，（コートカバーに）戻る幅が広くなります．そうすると，自分が走らなくても攻める展開が作れて，心理的に有利になれます．

バックハンドのストレートに打つコツは，ボールがバウンドする位置に左脚を置き，右肩に顎が乗って左半身が窮屈な感じと，（左）足の裏と膝，お尻に乗れている感覚でテイクバックが完了して，ボールが来たら「打てる」と思った所で思い切ってスイングします（図 2）．ボールが射程距離に入ってしまえば，目を閉じていても打てます．

（ストレートへ打つ時機は）相手のボールへの入り方や，ラケット面の作り方を見て，次の返球を判断しています．私は，ボールへの出だしの 1 歩目が遅かったので，ラリー中は相手が「後ろ脚重心なのか」，「きちんと踏み込もうとしているのか」で，常に相手の（打点への）近づき方が早いのか遅いのかをチェックしています．遅い時は，そのボールが軽くなったりコースが甘くなったりするので，私は前のめりになっています．「やっぱり甘くなった」と思ったら，（ベースラインの）内側に入って打っています．（打つコースに関しては）あらかじめ決めておかず，クロスもストレートも両方打てるように打点に入ります．自分で

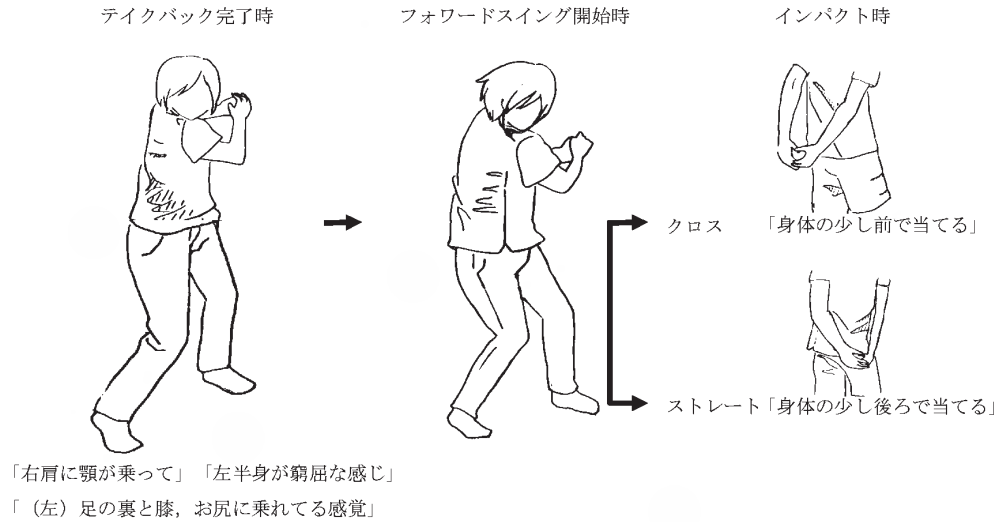


図 2　バックハンドストロークの動作（赤堀氏）

打つコースを決めなかったら，相手に読まれるはずがありません．（自分のコートでボールが）バウンドする前にテイクバックを完了させ，自分が早く打点に入れた時は，（フォワードスイングの直前で）相手を見て，「あ，打てる」と思ったらストレートに打ちます．ボールへの入りが遅れてしまっていたら（良い体勢で）打てないので，私にとってはディフェンス(守りのショット)です．

インパクトの位置は，（左）脚，膝，お尻，（右）肩を感じて打点に入れていれば，あとは少し早くラケットを振り出して，身体の前で当てるか，少し後ろで当てるかの違いだけでクロスとストレートに打ち分けます．

バックのクロスラリーを打っている中で，本来だったら当たり前にストレートへ打つところを，わざとショートクロスに打つのもポイントパターンの 1 つです．これはストレートを大事な場面にとっておくことで，ストレートの狙いを相手に絞らせないようにするためです．

3. 竹村りょうこ氏

フォアを得意としていたため，フォアのクロスラリーで主導権を取り（相手を外に出す等），オープンコートへフォアハンドで展開することがポイントパターンの 1 つでした．

フォアハンドのポイントとして，テイクバックを早くし，最適なポジションに入れれば（軸足の右脚から），確実に狙ったところに打てる感覚を持っていました．そのため，体勢が良い状態でボールを見極めることができれば，エース（クロスラリーから相手バック側ダウンザライン，センター付近から回り込み等）にも繋がりました．

ボールに対しては打ち分けが可能な入り方を意識し，打つ前の間（ま）と打点の前後でコースを変えていました．インパクト時までは脱力し，インパクト時のみグリップを握りボールに対して厚く当てていく感覚を持っていました．インパクト時の微調整によってボールをコントロールしているような感覚で，自分のポジションや相手のボールのスピードや球種によって判断していました．

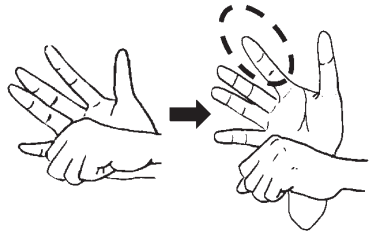
スイングとしては，ジュニア期はストレートテイクバックでしたが，プロになる過程で身体の使い方を習得してからは，自然にラケットヘッドが立つスイングに変わり，フットワークとラケットワークが連動するようになりました．

4. 佐伯美穂氏

フォアハンドが得意なので，ラリー中に相手のボールが甘くなったところを，自分がフォアハンドに回り込んで展開するのが私のポイントパターンでした．

バックのクロスラリー中に自分がフォアで回り込むための時間が欲しいので，力が入りづらい相手のバックの高い所に，回転量の多い重いボールを打ち続けて，相手のボールを甘くさせます．相手のボールがバックのクロスに行かずに，センター付近に甘く飛んで来たら，相手の動きをぎりぎりまで見ながら肩幅のスタンスで，サイドステップを使ってピョンピョン跳ねる感じのリズムの取り方で打点に入ります．ボールが自分のコートにバウンドすると同時に「グッ」と脚も一緒に沈めてテイクバックします．そこからストレートはクロスよりワンテンポ間（ま）を置くことによって変えられます．インパクトは，右の掌とガットが一体化していて，縦のガットにボールを食いつかせて打っているイメージでした．スイングの軌道はラケット面にボールが当たって押し潰して，その後（ラケット面の中で，インパクト時に鉛直最上方にある点を）人差し指で上げるイメージです（図 3）．基本は相手を振り回すためにオープンコートに打つようにして，（大事なポイントの）時に相手の動きの逆を突いたりしました．

しかし，自分のバックにしつこく集められた場



「ボールが当たって押し潰して」「人差し指で上げる」

図 3 インパクト時のスイングのイメージ（佐伯氏）

合は，スライス回転でストレートに流しました．すると，相手はフォア側に走っていってフォアのランニングショットをクロスに返してくる確率が高くなるので，自分は返ってきたボールをフォアで攻撃できます．また，ストレートに流すと見せかけてショートクロスに打ったり，ドロップショットを打つことによってボールに高低差をつけていました．それは，相手に同じリズムで打たれないようにするためです．つまり，相手に何をしてくるんだろうと考えさせるようにプレーするのです．

Ⅳ 考 察

1. テニスにおけるショットのコンビネーションの行動戦略

戦術が大きな役割を果たすスポーツにおいて，選手が好んで用いる行動戦略にはタイプが存在している（ケルン，1998，pp.96-98）．行動戦略は，選手がゲームの状況の中でリスクの確率を過小評価するのか過大評価するのかによって，戦術上の行為が大きく左右されることから，選手の個人特性の影響を受ける（ケルン，1998，pp.98-99）．そのため，たとえ起こったプレーの結果が同じであっても，結果をもたらした原因は，それぞれの選手が戦術行動をどのように解釈しているか，その志向に帰属すると考えられる．その志向に基づくと，本研究では，グラウンドストロークのショットのコンビネーションにおける行動戦略には，2 つのタイプが見られた．

1 つは，相手の行為に対応して自分の行為を決定しようとする志向タイプである．不田氏は「背景として相手の全身のバランスや立っている位置を把握して…ベースラインの中に入りストレートに展開していました」と語っていた．また赤堀氏は「ラリー中は相手が『後ろ脚重心なのか』，『きちんと踏み込もうとしているのか』で…私は前のめりになっています」と語っていた．ボールゲームにおいて，「ボールを持たない動き」は常にボールの位置，相手の位置，空いている場所を観察して状況に即したものでなければならない（丸井，2012）ことを考え合わせると，これらの語りは，ラリーの打ち合いの中で，常に相手の体勢や状態を観察し，相手の打球を予測しながら自分の位置取りを決定しようとしていることを示している．また，「相手のバランスが少しでも崩れて『100％（の体勢）では打てない』と分かったら…」（不田氏），「『やっぱり甘くなった』と思ったら…」（赤堀氏）という語りからは，自分が攻撃を仕掛けるために，相手の体勢の良し悪しを重要視していることを示している．これらのことから，不田氏と赤堀氏の語りは，自分の得意とするショットを繰り出す準備をしながらも，相手の行為に対応して自分の行為を決定しようとする志向タイプ（以下，“対応しようとする行動戦略志向”と表す）と捉えられる．

他の 1 つのタイプは，自分の行為に相手を対応させて，自分が事前に決めていた行為を遂行しようとする志向タイプである．たとえば，「相手のバックの高い所に，回転量の多い重いボールを打ち続けて，相手のボールを甘くさせます」（佐伯氏）という語りは，自分の得意なショットを打ち易くするための打球を相手から導き出そうとする行為であることを示している．また，「フォアのクロスラリーで主導権を取り（相手を外に出す等），オープンコートへフォアハンドで展開する」（竹村氏）という語りは，相手の位置取りを外に出すだけでなく，自分の得意なショットの威力で相手に心理的圧力をかけて，ラリーの主導権を握ろうとしている可能性を示している．打ち返し型のボールゲームでは，敵に極めて困難な条件を付けて行為ミスを誘発させるため，攻撃行為を選択したり組み立てようとする（シュテーラーほか, 1999, p.46）．攻撃の局面を作り出すためには，自分の打球によって相手の返球体勢や位置取りを崩す前段階が必要となる（公益財団法人日本テニス協会，2015a，p.143）．これらのことと考え合わせると，佐伯氏と竹村氏の語りは，自分の得意なショットを用いて攻撃するために，相手の行為を自分に有利になるように誘導して行動しようとする志向タイプ（以下，“対応させようとする行動戦略志向”と表す）と捉えられる．

以上のことから，テニスのラリーの攻防においては，自分の得意なショットを持ちながらも，それを使う時機を見極め，相手に対応してショットを決定しようとする行動戦略志向と，自分の得意なショットを用いた攻撃パターンを実行するために，相手からのミスショットを打たせるように仕向けようとする行動戦略志向の 2 つのタイプが存在している可能性が示された．

2. 2 つの行動戦略志向に共通するグラウンドストロークにおける戦術的思考と動作

(1) ストレートへの攻撃に転じる時機

クロスラリーからストレートに方向転換することは，簡単な技術ではない．その理由として，ストレート方向のネットの高さが中心部と比較して高くネットミスをするリスクがあること，またクロスに比べてコート内に収まる距離が短いため後方へアウトミスをしてしまうリスクがあること（三橋ほか，2012），クロスに打たれたボールをストレートに打ち返すには，約 20° 角度を変える必要があること（水野，1985）が挙げられている．クロスラリーにおいてストレート方向に打球する行為について，赤堀氏は「こちらが狙いすましてストレートに打つことによって…（コートカバーに）戻る幅が広くなります．そうすると，自分が走らなくても攻める展開が作れて，心理的に有利になれます」と語っていた．この語りは，ストレートへ打球することはラリーを優勢に進めるための意図があり，ミスショットを冒すリスクを了解しながら用いていることを示していると考えられる．

クロスラリーの連続からストレートへの攻撃に転じる時機について，不田氏は「自分が打って，ラケットからボールが離れた少し後くらい…これは，相手の体勢を先に読みます」と語っていた．この語りは，ストレートへの攻撃に転じる際は，クロスへの打球感覚と相手コートに到達するまでのボールの軌道を手がかりにして，相手を追い込めると判断した場合にストレートに打つことを示している．また不田氏は「相手を少し動かしたいなという時にもストレートに打つことがあります．（自分がベースラインの後ろにいるので）それはエースを狙うボールではありません」と語っていた．さらに佐伯氏は「自分のバックにしつこく集められた場合は，スライス回転でストレートに流しました」と語っていた．これらの語りは，完全に相手の体勢が崩れていない場合でも，攻撃を仕掛ける可能性があること，ストレートに打球することで，得意なショットを打つ機会を得るための布石としていることを示している．ラリーにおいては自分が守勢に回ったら返球はクロスに，攻勢に転じたらストレートに返球する（児玉，2014，p.118）と言われている．しかし不田氏と佐伯氏の語りは，相手を追い込んでからストレートに打球するというセオリー以外にも，均衡状態のラリーの状況に変化を加えるためにも用いられることを示している．

以上のことから，卓越したテニス選手は，ストレートに打球することはラリーの状況に応じて相手を劣勢に追い込んで攻撃すること，またはラリーの均衡状態を打破するという用途があるために，その効用を念頭にストレートに打球する時機を判断していると考えられる．

(2) 準備局面の重要性

クロスラリーの連続から次の打球を決定する要因について，「ボールへの入りが遅れてしまっていたら（良い体勢で）打てないので，私にとってはディフェンス（守りのショット）です」（赤堀氏），「テイクバックを早くし…エース（クロスラリーから相手バック側ダウンザライン，センター付近から回り込み等）にも繋がりました」（竹村氏）と語っていた．グラウンドストロークにおける準備局面は，テイクバック開始から完了まで（道上・阿江，1998）である．テニスにおける攻防とは，テイクバックを作るまでが防御であり，目標とするコースへボールを打ち返すまでが攻撃であると言われている（井芹，2003）．しかし，この赤堀氏と竹村氏の語りは，ショットを打つ前のボールへの入り方が積極的なつなぎ球を打てる攻撃的プレーを生み出していることを示している．これらのことから，テニスのラリーにおける攻撃と

防御は，局面として捉えられるものではなく，ボールへの入り方がラリーの優位性を決定する要因の1つであると考えられる．

具体的なボールへの入り方と打ち方について，不田氏は「相手の動きは，自分が打とうとしているボールをしっかり見て…ベースラインの中に入りストレートに展開しました」と語っていた．赤堀氏は「(打つコースに関しては）あらかじめ決めておかず，クロスもストレートも両方打てるように打点に入ります…（フォワードスイングの直前で）相手を見て，『あ，打てる』と思ったらストレートに打ちます」と語っていた．また竹村氏は「ボールに対しては打ち分けが可能な入り方を意識し」と語っていた．さらに佐伯氏は「相手の動きをぎりぎりまで見ながら…打点に入ります」と語っていた．これらのことは，いずれの選手も，相手の動きを見てからストロークを繰り出せるように，ストレートとクロスのどちらのコースへも打てるフォームでボールへ入ろうとしていることを示している．

(3) コースの打ち分け方法

クロスとストレートのコースの打ち分け方について，不田氏は「ストレートの方がボールを引き込み，ワンテンポ遅らせて『クッ』と体幹にタメを作って流します」と語っていた．赤堀氏は，「(左）脚，膝，お尻，（右）肩を感じて打点に入れていれば，あとは少し早くラケットを振り出して，身体の前で当てるか，少し後ろで当てるかの違いだけ」と語っていた．また竹村氏は，「打つ前の間（ま）と打点の前後でコースを変えていました」と語っていた．さらに佐伯氏は「ボールが自分のコートにバウンドすると同時に『グッ』と脚も一緒に沈めてテイクバックします．そこからストレートはクロスよりワンテンポ間（ま）を置くことによって変えられます」と語っていた．打点の位置は，打球方向を決定する要因の1つであり，世界一流女子選手においてクロスは右肩近く前方，ストレートは右肩から離れたやや後方の打点でボールをとらえることでコースを打ち分けている（道上・阿江，2002）．本研究の対象者である卓越した女子テニス選手は，先行研究の結果を支持することに加え，ショットのコースをストレートかクロスに打ち分けるために，タメと呼ばれる打つ前の間（ま）を取ることによって，打点の位置を前後に調節するというタイミングの変化を用いていることを示していると考えられる．

3. 2つの行動戦略志向に見られるグラウンドストローク動作におけるコツの特徴

グラウンドストロークを打つ時の動作について，“対応しようとする行動戦略志向”と捉えられた選手は，「フォアは片手打ちのため…体幹を使えるようにするためです」（不田氏），「右肩に顎が乗って左半身が窮屈な感じと……思い切ってスイングします」（赤堀氏）と語っていた．グラウンドストロークの準備局面においては，主要局面に必要なエネルギーを蓄積するために，体幹の捻転動作が起こる（ショーンボーン，1999）ことから，これらの語りは，体幹の捻転動作をコツと意識してストローク動作を遂行している可能性を示していると考えられる．

一方，“対応させようとする行動戦略志向”と捉えられた竹村氏は「インパクト時までは脱力し，インパクト時のみグリップを握りボールに対して厚く当てていく」と語っていた．また佐伯氏は「右の掌とガットが一体化していて…人差し指で上げる」と語っていた．これらの語りは，自分の得意ショットのインパクト時における手の感覚を手がかりにして，ストローク動作を遂行している可能性を示していると考えられる．

以上のことから，“対応しようとする行動戦略志向”の選手は，ストローク動作における準備局面に，“対応させようとする行動戦略志向”の選手は，主要局面にそれぞれ意識の着眼点を置いていると推察できる．しかし，選手の得意とする行動戦略志向とグラウンドストローク動作のコツとの間の関係性については，今後事例の数を増やして詳細に検討し，実践の指導現場に活用できる知見を導く必要があると考えられる．

V 結 論

本研究の目的は，一流選手の持つテニスのグラウンドストロークにおけるショットのコンビネーションに関する実践知を知識化し，個人戦術力の向上に役立つ知見を実践現場に提供することであった．この目的を達成するために，国際レベルで活躍した経験を持つ4名の女子テニスプレーヤーを対象にインタビュー調査を行い，その語りを質的に分析した．結果は以下の通りであった．

1）卓越したテニスプレーヤーは，グラウンドストロークにおけるショットのコンビネーションにおいて，相手の行為に対応して自分の行為を決定しようとする行動戦略志向と，自分が事前に決めていた行為ができるように，自分の行為を相手に対応させようとする行動戦略志向の2つのタイプが存在する可能性が示された．

2）グラウンドストロークの準備局面におけるボールへの入り方がラリーの優位性，すなわち攻めのストロークを打てるのか，守りのストロークを打たざるを得ないのかを決定する要因の1つであることが示された．

3）グラウンドストロークのコースをストレートかクロスに打ち分ける方法は，ストレートとクロスのどちらのコースへも打てるフォームでボールへ入り，打つ前のタイミングの変化を用いていることが示された．

謝辞

本研究の実施に際し，調査への協力を快諾し，多大な時間と労力を要する調査用紙への回答および面接調査への対応をいただいた一流競技選手の皆様に，心より感謝申し上げます．

付記

本研究の一部は，平成28年度日本コーチング学会・日本体育学会体育方法専門領域の研究助成，および科学研究費補助金（基盤研究C　課題番号16K01695）を受けて実施された．

文 献

會田宏（2006）個人戦術．（社）日本体育学会監修最新スポーツ科学事典．平凡社，p.179.

會田宏（2012）球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方．スポーツ運動学研究，25：17-28.

Gillet, E., Leroy, D., Thouvarecq, R., and Stein, J-F.（2009）A notational analysis of elite tennis serve and serve-return strategies on slow surface. Journal of Strength and Conditioning Research, 23(2): 532-539.

井芹武二郎（2003）テニスの初心者指導について．北海道大学大学院教育学研究科紀要，89：1-30.

海野孝（1994）テニスにおける戦術の心理学．体育の科学，44(7)：518-522.

ケルン：朝岡正雄ほか訳（1998）スポーツの戦術入門．大修館書店.

児玉光雄（2014）実は180度違う一流テニス選手の思考―劇的に勝てるようになるトップだけが知る視点―．東邦出版，p.118.

公益財団法人日本テニス協会（2015a）テニス指導教本Ⅰ．大修館書店.

公益財団法人日本テニス協会（2015b）JTAテニスルールブック2015．（公財）日本テニス協会，p.13.

丸井一誠（2012）小学生のハンドボール授業における攻撃側の「ボールを持たない動き」の特徴に関する研究―ゲーム様相との関連性に着目して―．スポーツ教育学研究，31(1)：1-11.

道上静香・阿江通良（1998）世界一流女子テニスプレーヤーのフォアハンド・グラウンド・ストロークのキネマティクス的分析―クローズドスタンスとオープンスタンスの比較．バイオメカニクス研究，2(4)：242-251.

道上静香・阿江通良（2002）世界一流女子テニス選手のフォアハンド・グラウンド・ストロークのキネマティクス的分析―クロス打ちとストレート打ちの比較―．バイオメカニクス研究，6(4)：259-269.

三橋大輔・森井大治・海野　孝（2012）テニスプレーヤーにおけるフォアハンドストロークの技術，戦術などの特徴に関する研究―競技レベルによる比較から―．スポーツ運動学研究，25：29-43.

水野忠和（1985）テニスにおける巧みさ．体育の科学，35(9)：682-688.

中込四郎（2003）面接調査の方法について．阿江通良編　平成14年度スポーツ医・科学研究報告No.Ⅲ　ジュニア期の効果的指導法の確立に関する基礎的研究―第3報―．財団法人日本体育協会，pp.3-4.

O'Donoghue, P.G. and Ingram, B（2001）A notational analysis of elite tennis strategy. Journal of Sport Sciences, 19: 107-115.

桜井厚・小林多寿子（2005）ライフストーリー・インタビュー　質的研究入門．せりか書房．
佐藤陽治（1991）テニスの実戦におけるグランドストロークの深さの効果について．学習院大学体育研究紀要，2：1-23．
シュテーラー・コンツァック・デブラー：唐木國彦監訳（1999）ボールゲーム指導事典．大修館書店，p.46．
ショーンボーン：佐藤雅幸訳（1999）ショーンボーンのテニスコーチング BOOK．ベースボール･マガジン社，p.22．
高橋仁大（1998）テニスのゲーム分析のための技術の分類についての一考察．鹿屋体育大学学術研究紀要，20：11-17．
高橋仁大・前田明・西薗秀嗣・倉田博（2006）テニスにおけるポイント取得率と技術との関連性：日本の地方学生大会における検討．体育学研究，51(4)：483-492．
山田幸雄（1996）女子テニストッププレーヤーにおけるグランドストロークの配球～勝ちセットと負けセットの違いについて～．筑波大学運動学研究，12：1-6．

（2017 年 4 月 26 日受付
2017 年 11 月 9 日受理）

Advance Publication by J-STAGE
Published online 2018/1/19